

玉那覇香代子さん

1934(昭和9)年2月生まれ

当時の本籍地 沖縄県

民間人(当時10歳)

沖縄



●1945(昭和20)年3~4月

与那原のオナガという部落にいた。家族は父親と兄(16歳)と私と妹。母親は昭和13年に亡くなった。兄は防衛隊に行った。

同級生28名で3名は学童疎開。部落に残っていたのは9名。生き残ったのは3名。私だけ無傷だった。

「空襲警報発令」の放送ですぐ授業は打ち切り。防空壕まで駆け足で20分。機銃のバリバリという音の下でキビ畑のなかを逃げたりした。空襲は11時頃から始まって3時頃に止む。やんだら家に帰る。畑から芋を掘って食料の準備、豚のえさやり、食事の準備も明らかに注意しながら、芋と豆を黒砂糖で炒ったり。

久高島から艦砲射撃がくるようになって、首里の識名に避難して、さらに島尻の米須という部落に下っていった。その砂糖小屋で暮らしていたが、また艦砲射撃が落ちてくるようになった。ビュー、ドーンときて破片が飛び散る。爆撃の後には石ころが転がっている。父親は親指くらいの石を50個くらい拾ってきて、「外に出るなよ、これで遊んでいなよ」と。喜んで妹と遊んでいた。

ある日、親戚の家で馬がやられたので4、5名で肉を取りにいった。「楽しみだねえ」と妹と石ころ遊びしていたら、艦砲射撃。妹がやられた。私には分からなかった。「次あんたでしょう？」って、でも妹は倒れて返事も何もなかった。父親が帰ってきて、妹が動かないと言ったら「やられたんだなあ…」と。妹の体を腕に抱えて、山に葬った。

別の場所に避難しようと父親と歩いていたら、また、ヒュードーン。父親を見失ってどうなったか分からない。そこから私はひとりぼっち。

●1945(昭和20)年5月頃か

歩いていると友達に会った。ひとりだというと「ウチに来なよ」と。でも食料も足りない。その子のお母さんに「向こうの防空壕におばさんがいるからそちらにいこうね」という口実で連れ出された。山道を通り抜け、キビ畑を通り抜け。すると友達の家で艦砲射撃が直撃。23名全滅。

友達のお母さんは叫びながら山から駆け下りた。私は後を追ってゆっくり降りた。家に入ると血だらけ。肉があつちの壁こっちの壁。頭はこっち。腕の部分はこっち。半狂乱になって子供の体を捜すおばさんに、「これトシコの腕だよ」といっても何も答えなかった。

そしてまた1人になった。石垣にもたれてお昼寝をしていると、そこにまた艦砲射撃。「助けてくれー」と声がして、3年のとき恩師のギコウ先生が見えた。「香代子じゃないか」という先生は、防衛隊にとられたらいけないと、ひげを伸ばして寝巻きとステテコで見違えるような年寄りになっていた。その先生が歩くのが早くて見失った。「先生、先生」と呼んでも分からない。「もう、いいさ。つかれた」と大きな木の下で休んだ。

そこには、子供2人を連れた女性がいる、「学校の小使いさん(用務員)の子供でしょ」と話しかけられた。父親は私たちを連れて学校に宿直していて、そこで先生に共通語を覚えてもらった。オナガの部落では共通語の得意で礼儀正しい子供と褒められていた。

持病の胃痙攣が起きた。「おばさん、胃が痛い」と言うと背中を叩いてくれた。ふとそのおばさんが背中を叩くのやめた。「おばさん？」振り返ると、そこでおばさんが死んでいる。長女のヤスコさんも大腿部をやられた。歩けないからと、長男と私だけで喜屋武(きゃん)岬の壕に避難した。

移動中に死んだ兵隊さんの死体の上を歩いた。「水ちょうだい、水ちょうだい」と言う人がいたが、私は何もできなくて、ただ「ごめんねえ」と死体をよじ登らないと歩けないような溝だった。

●米軍がきて、「出てこい、出てこい」と言う。出て行くと日系人で、「人はいる？」と聞くので、「たくさんいるよ」と応えた。「はやく出てこないと、皆死んでしまうよ。みんな出ておいでと伝えて」と言われ、皆に伝えた。

●戦後、父と一緒に妹の骨を拾いに行った。6年生になっていた。埋めた場所も空爆されて骨は見つからなかった。「何度もやられたんだねえ」って、石ころを3個拾って帰ってきた。骨は拾えなかったけど魂だけ。

(取材日:2011年2月4日)